

五大カ

寛政の末  
北溪画

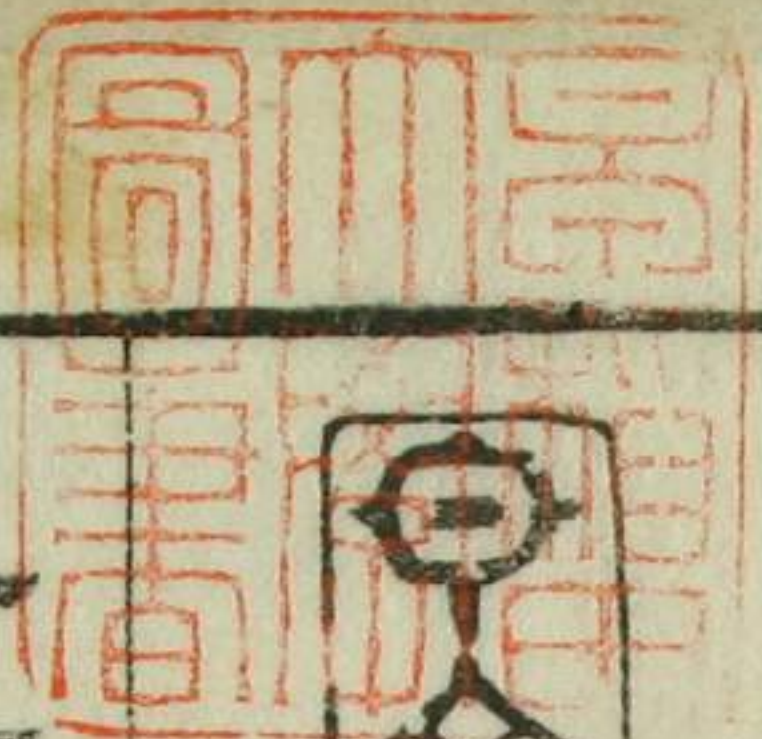
克

~13  
1963  
42





正



狂言

雜話

作者

一

此編也比戲場世話  
狂言述江東之樂事

狂言

大

鹽屋艶二

正



へ13  
1963  
42

五大力

以以中叶生うまもたまふ  
あは海えもの柱もふきし清  
せしくはしと婦ふおきく花  
急んと何事かますあまの  
たんやうきうにひはしは

うらうけくふこごハくハ  
五ふんア記たをまらから  
う海ちあ幾おんやぢんあが子  
あまふきくかう海そふお  
まし茶とえおし

五本五瓶述



自叙 西方社

狂言綺語ハ演樂河ヲ欠不致流  
子至一山ノ如き一ノ至一持  
處子鳴一ハ是と戒の教訓  
〜人飲不た〜番由農  
於ハ法寺ハ書の明にハ序

井ノ駿劇ハ神を衆ヲ回轉  
語ハ時を〜一〜  
乃引舟ハ一風ノ幕  
老ウ〜ハヤキ〜手叩〜  
斷漢者續結の完土宵ハ互  
比族移を以〜樂房おち衆







迴屏風外行燈  
 閣、番枕相連簾  
 紙、濃、半、夜、忽、驚  
 魂、膽、夢、生、憎、別  
 路、八、幡、鐘、

影二老人乞



北漢画



目錄

薩摩屋原之巻の尻

鎮屋小まの巻

母屋之五巻の尻

〽

狂言  
雑話

五大力

鹽屋艶二著

存端



ぎとエ 女めのおゑんなり 疾たとひとあらうふ  
何なれば 疾たとひとあらうふ 疾たとひとあらうふ  
然しかしも 疾たとひとあらうふ 疾たとひとあらうふ  
論ろん 疾たとひとあらうふ 疾たとひとあらうふ  
牙くのあらうふ 疾たとひとあらうふ 疾たとひとあらうふ











源 ウ、そらうよそ日の半どそれううお見と陰へ  
川<sup>ナ</sup>がして行とくうとあううとをあふくどか  
きろのがつういうも掌<sup>い</sup>れか小成でくを後  
そよとあやアあちへとりうがううとあて  
たのんど半とあれのあへの<sup>方</sup>行<sup>ま</sup>る<sup>つひま</sup>  
源 <sup>方</sup>そ<sup>れ</sup>も<sup>お</sup>ま<sup>じ</sup>ア<sup>う</sup>と<sup>各</sup>あ<sup>て</sup>こ<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
あやア教<sup>う</sup>の中<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>る</sup>中<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup><sup>方</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
そらけれども何一にまとあれらるのうままを

ままれくま<sup>う</sup>こ<sup>ん</sup>な<sup>若</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>  
源 <sup>方</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>中<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>る</sup>こ<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup><sup>方</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
うあてと人間もすまおへまの<sup>方</sup>それら  
やんふモア若<sup>う</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
其半と指<sup>ね</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
半で源らん試<sup>あ</sup>く<sup>ち</sup>せ<sup>て</sup>此<sup>の</sup>源<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
わう程なさんねエとら<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
ま<sup>ま</sup>く<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>



















ねへうう一箇中退るけらねく申おく申  
と一生をいせむねなるいご<sup>方</sup>とんる備乃  
後への申あふのふささうぞとぞうして  
驚してわらうらおめも田へゆらまらうふ  
かんならる先まりのでもねへか<sup>源</sup>アま  
なり系備てわらさ<sup>方</sup>私にも昔号と  
きくわらうういなき海に事としてらん  
らんあよ<sup>源</sup>とるや、いごごときとらむ

<sup>方</sup>そしてア高<sup>時</sup>うあるくあぬとま  
あつこなり義理のころの備もほけら  
か<sup>源</sup>そ位もあまアどううかううやう  
とるね<sup>方</sup>とんるぞと<sup>つ</sup>あて  
あがううあふあるさか<sup>源</sup>どりしてま  
<sup>方</sup>行でもあまり出るらんねがのよ<sup>源</sup>とけ  
と出さアねへの<sup>方</sup>ホニ冷入人より  
いりては退<sup>付</sup>どうぞしてみんをれ



えうへうとありてわろとそれかこのみぢろ  
そらでもあはざアはまが有めへモフ麻中じや  
ぬう万モフあがわけやアあ先へぬエアこちへ  
まるとへんあせへまトまを切ツクア  
ハ獲種ゴヨシ

○そこ

廻一舞巻ふて道具をとり子代巻れ二階  
の取付とるれ  
今更転じていもそあげはて田舎し

おしを我月のま糸乃取れを門は小鏡巻とまきり降子哉  
ましふこどもを此あち中かもし一或とめを内中えやを  
二階ゆい後だいのそ介えさんぞうも挿さるて有抱の子位  
とも和らんもまを居風員もつり髪結もまて仕也一おさん  
は日ハ具撮屋の影え世え物の出まん  
ゆ子位そく暗くあつとあつと  
移へうのふ角ホニニ圖中巻へきうはやくふあや  
ねへかろふの巻巻えハ巻巻やういぢぢりぬごえ丸丸サ  
抄巻巻者ハくふとりのさ角離巻さんとちちを  
むいそみまお先へあやア刻むざごんぶ能似合  
美おぬのさんも能結ぬエ等髪ハおつとるんが



















方カタどししといふもねえれたつらねえよも  
喉ノドはまらねえのカタ大オホそらうらうよのよ源ヒ食シ  
方カタもめもあんなるる免マとれども外ウチ小コ  
高タカ夢ユメといふちやアあけねえ半ハクッレニッア  
いイはたでえ持モチら進マシね毎ツごとく其ソノへの苦ク方カタ  
ころののもむと方カタさうてらうたあやア志シの  
れどもけらうられやうどやアモウ融ツ合ガグワレ  
ころころあうきうらふらんやア半ハとさかせ

はれむとまぐねがあまやアアあかんアかんあかんあかん  
孫まごとやうにまよふころでもあんのをトカあて  
ああああるあ方カタおまんとあうでいけりすはま  
方カタフイヨッレフイヨッレあも獨ひとりう方カタいんめとお民たみ食シ  
とお揃そろいおあささ方カタアアアアアアアア  
いやとトトあやうはらあやうはら仲なつそて保たもきんもモア内うちへ  
ああああなるのさあ方カタあまもああく  
法はふかあでまうあまやアあまあへのさ大オホ



























らみハエ[音]それヤアヤびのりことなる  
みりのとねとさきんは内巻を巻いて[五]ハアそんあ  
年りん及ふきさる世王[音]そんあうはね[八]ニヤク  
又ハ倉うらぐニヤク又[二]サア何ぐりはは何が  
る者さんでもまご狐こんヤアお松まつ久松くまつざらうサア  
きとい小こアアて仕しおおまま[音]さいまいやそん  
ああびびけけととままごごががかかるるままののらら狐こととままててまま  
ててそそううへへままままおお仕しおおままててううららおおかかアアししなな

廿一

自分ごりのいへそまヤアヤとねとお猫  
きん[音]そふさ今のわお中ひみ助さんてんで  
仕しおおねねエエななひひままままううごごののふふ[八]ああままおおねねととほほ  
よよままままででももかかいいかかばばごごのの見み有あととままままででかか  
みみそそんんああううちちもも男おとこハハ男おとこごごううごごねねエエ丹たんねね  
トウツてのらあへ娘をおちま  
ありうしうまをりつを  
クイ何なにごごかかトあまがくま  
なふとさやく  
トああいいききんん[十]サア二侍しやくねねととちちとと仕しおおてて後あと小こつつねね

廿二











ござり候せん [三] ぞとせんとて工ぬいのさ [万] ちや  
ひまをらやんさ [千] 小海んぬ名事ハござりてござ  
りまを [万] そんなまのちりませんもの [三] 源流  
ハござりまを [万] 源流とらへ [三] まさ源流  
がゆよ [万] 源流と [千] 小海んのちりません  
中さう入 [万] 何の面白くもぬ工事で人よとせんの  
彼とつれこのさ [三] ちやアわたりなくぬ工と云  
けはたおせん工之味せんハ薩老の魂ちやぬへり

その魂小折ちやうひとまをく五た力とせんとてねぬ  
大事に志して居るちやぬ工 [万] ちやそれ人  
乃ねさそうに破やぶて張ちやうえて仕舞申さ [三] ちや  
と清きぬ工 [万] ハチ ちやちやちやちや  
[千] ちやちや ちやでも何でも名事ガ有るまへ  
まめしてちやちやちやちやちやちやちやちや  
そちやちやちやちやちやちやちやちやちや  
の魂うまげくさ [万] ちやちやちやちや [千] ちやちや



そらうぶるア山をりませんがそれ甘所なるり  
養者なるり。弟とせうして賞アのひとあひ  
茶をのめハ給令とあぐ居物ごと幾分来て  
も一白梅のむ舟宿ハ船小多くやううら  
とあつて居るる志申る者人介とむとあふされ  
ちアアひあやぐせんの子とあふ<sup>てはあふ</sup>方そのとア  
そらうぶる千さんのひひなるあぐ世<sup>てはあふ</sup>三あが何  
あ氣が付やうにゆと<sup>あふ</sup>握びへむぐうのむぢちで

居るうちがうく山<sup>てはあふ</sup>とさおの養此養は  
をえつると何と志あぐ減てあふ<sup>てはあふ</sup>子<sup>てはあふ</sup>千<sup>てはあふ</sup>ま  
杖をてかううかやうためてこけりまはあ  
時子モウちんとお休みなさあは私ハ何ありま  
あやう<sup>てはあふ</sup>方<sup>てはあふ</sup>なせ子さんりつとあふ<sup>てはあふ</sup>子<sup>てはあふ</sup>千<sup>てはあふ</sup>ま  
そとあれが<sup>てはあふ</sup>あはそらう那とやうてこま<sup>てはあふ</sup>五<sup>てはあふ</sup>け  
やアあやせんあはさの<sup>てはあふ</sup>三<sup>てはあふ</sup>そらんる  
のい<sup>てはあふ</sup>か<sup>てはあふ</sup>が<sup>てはあふ</sup>ん<sup>てはあふ</sup>な<sup>てはあふ</sup>時<sup>てはあふ</sup>に<sup>てはあふ</sup>終<sup>てはあふ</sup>て<sup>てはあふ</sup>らん<sup>てはあふ</sup>あ<sup>てはあふ</sup>子<sup>てはあふ</sup>千<sup>てはあふ</sup>ま















跋

予の友坊屋魁二ちのるまの  
二度五火カハ刺狂言を  
ほぐる。不倚堅廣裁裁  
乃聲のつ紙行るる  
此書まの如身廣怖を

片心ふれわぎに  
の親玉。うねる  
あやきま。役者作者  
遠のふあまうど。は  
唐古まで。まひど  
自撰ひら—ひら場ば荒



乾くと掛く。容儀の如く  
かみきりしおもしろ

鹽屋艶二隣てま

味増屋の獨山まこ

子回真一堅廣



之前

5

4



